太宰府人物志

資料室だより⑦

武谷水城と『筑紫史談』

武谷水城は嘉永5年(1852)12月16日、御笠郡水城村で福岡藩士尾石信一のもとに生まれます。最初の名を豊といい、明治7年(1874)に元福岡藩医武谷祐之の養子となり、後に三女仲と結婚して武谷姓を名乗ります。そして同23年、出身地に因んで名を水城と改めました。修猷館、文武館で学んだ後、明治5年に金沢医学校に入り医学の基礎を修め、同7年に三宅坂上陸軍軍医学校に進学します。卒業後、軍医となって各地に赴任し、同39年には陸軍軍医監、軍医少将まで昇進しました。この間、同じく軍医であった森林太郎(鴎外)とも親交を深めたことはよく知られるところです。

予備役編入後の明治43年に東京から福岡市に移り住み、社会教化事業に尽力しました。具体的には財団法人黒田奨学会の理事や福岡県教育会会長に就任し、あるいは東京帝国大学内への神道学講座設置を文部大臣に働きかけました。なかでも郷土史研究の発展に寄与したことは特筆すべきでしょう。大正2年(1913)に筑紫史談会を創設し、機関誌として『筑紫史談』を発刊しました。

同誌は年間1、2冊、最盛期には年4冊が刊行され、昭和20年の最終号までに90集が出されています。その内容は多岐にわたり、古代から近世までの筑前地方に関わる事件が論じられました。今日の歴史学の見地から見れば研究の水準は決して高いとは言えませんが、実証的な手続きが意識されており、当時としては最新の成果が記されていたと考えられます。

武谷自身も同誌で健筆を発揮し、誌中で最も多くの論考を書き記しています。彼の研究の特徴として太宰府の史跡に光を当てたことが挙げられるでしょう。発掘調査がほとんど行われていなかった時期に水城や観世音寺などの史跡について、文献を駆使してその詳細を明らかにしようとしました。この他に元寇殲滅の地をめぐって郷土史家の木下讃太郎と激論を交わすなど、耳目を集める論考も残しつつ昭和14年(1939)8月15日に享年88歳で没しました。

市史資料室　内山一幸